企画１　東アジア共同体と国際文化学

東アジア世界の地域ネットワーク
――琉球・沖縄から見る“アジア知”の史的円環

パネリスト　**濱下武志**
Takeshi HAMASHITA
●東京大学名誉教授
（東アジア近現代史）

はじめに――グローバリゼーションのなかの「地方」（Local）の再登場

急速に進行するグローバリゼーションの動きは、これまでの単線的な世界発展系列のなかでのアジア論や、「世界」から「地方」に至るまで上下に系列化された地域論の再検討を強く迫っている。地球規模の課題が次々と起こる中で、グローバル視野の地方や地域の新たな役割、グローバルな地域主体の形成が求められている。グローバリゼーションの現在では、全ての地域空間は相互に円環を構成する連携の単位となっており、大小や上下の関係はなく、多角的なネットワークとして構成される。地域ネットワークそれ自体も、一面では緩やかなつながりが強調されるが、他面では非公式・非制度のつながりとしてすべてに不可避的な“強制”を促していることも否定できない。

さらに、地域空間を構成し相互につなげる単位として、海洋や都市という地域単位が、人類の生活に対して極めて大きな役割と影響をもっていることが改めて確認されてきている。そのなかでグローバリゼーションが引き起こした地域動態（Regional Dynamism）は、アジアをどのように捉え直すかという課題を問うていると同時に、我々は今後どのようなアジアの地域ネットワークを構想するかという課題の実践を求めているといえよう。

１　グローバル時代のアジア

これまで、国際化や世界化という表現によって示されてきた地域の開放や拡大は、グローバリゼーションの動きによって大きく変わっているといえる。国際化や世界化は、一般的には、国家という単位を中心においてきた視野である。これに対して、グローバリゼーションの一つの大きな特徴は、その国家をも地域化し、一つの地域単位とみなしたという点にあると考えられる。

地域空間系列の変化は、これまで国家を中心とした地域序列から、グローバル時代には、グローバルが世界に置き換わっただけではなく。グローバルという地域動態が、国家をはじめとするさまざまな地域空間を均等の位置においたということができる。

伝統的世界体系は、近代国家の基本のひとつである領域国家を単位として、国家を中心に世界が編成され、地域が序列化されてきた。いわば、地域空間を上下関係のタテ系列で空間秩序が系列化される形で編成されていた。地球あるいは〈グローバル〉とは、これまで国際関係あるいは世界という枠組みを前提として理解されてきた。すなわち、世界を頂点として、その下に大地域――アジアやアフリカ、アメリカ大陸など――があり、それから領域国家という国家、さらに国のもとの下位地域としての地域――〈地域政策〉というときに想定されている単位――があり、最後にあるいは末端に〈地方〉という地域があったわけである。日本史の場合には〈地方史（じかたし）〉というかたちで地方性を説いてきた。また、世界を最上位におき、国家に収斂する地域関係に対しても、ローカル（local）や在地性＝インディジナス（indigenous）を強調し、いわば下からの地域関係の主張や国連などの政策が試みられてきたことはあるが、基本的には上記の上下関係を前提としてきたということができる。

これに対して、グローバリゼーションの現代では、すべての地域空間は円環を構成するそれぞれに一つの単位となっており、地域間相互には大小や上下の関係には無く地域関係は多角的なネットワークとして示される。自らの地域単位は他のいずれの地域空間とも接続可能である。さらに、地域空間を構成する単位として、「海洋」や「都市」という、これまで国家と直結しなかった地域空間が新たに登場し、それらが実際には人類の生活に対して極めて大きな役割と影響を持っているということを警告したともいえる。すなわち、この地域連関の特長は、グローバリゼーションが世界を地球規模で大きくしたというだけではなく、ローカルをグローバルに直結させ〈グローカル〉などと表現されるように、新たな地域間関係の組み合わせを示したものである。これまでの国家も歴史的には、重層し共有される地域空間の一つであったということがより明瞭に示されたということである。同時に、どのような地域空間を考える場合においても、グローバルという動態からの接近が求められているということも留意すべきであろう。

２　アメリカの「脱欧」とアジア・アイデンティティ

そこでは、アメリカは、自らのアイデンティティを、太平洋に拠って「脱欧」することを通してグローバル化しようと試みている。例えば、歴史研究の分野では、アメリカ南北大陸を世界史の中心としてそこから大西洋と太平洋を配置して描こうとする「グローバルヒストリー」を強調する動きが進んでいる。一つの例としてK. ポメランツによるヨーロッパ中心史観への批判と中国・アジアとヨーロッパとの対比に基づく新たなアメリカの登場という議論がある。

これらの議論は、いわば太平洋体験を通して、また太平洋を論ずることにより、アジアを論じようとしていると言える。アジアを考えるとき、またとりわけアジアの近未来を考えようとするとき、その方向が太平洋をめぐる地域関係のさまざまな文脈の再吟味を通して改めて示唆される可能性を示していると考えられる。言葉を変えて、東アジアを論じようとするときに、東アジアのみを取り出したり、さらにその内部を区分けすることから論ずるのではなく、それを包み込んでいるアジアを、また19世紀末から現在さらに未来にいたるまで太平洋をまたぐ〈アジア・太平洋〉の文脈においても見るということが必要であろう。

さらに言うならば、アジアを論じようとするとき、海洋世界をグローバルに論じる中で始めてアジアを論ずることが出来る、という考えは必ずしも常におこなわれてきたわけではなかったとも言える。

３　中国の「脱亜」とアメリカ経由の日本文化論

グローバル化がいっそう進む中で、中国は「脱亜」をめざし、アメリカを交渉相手としながら東南アジアや中央アジア諸国とも多角的な地域連系を深めている。そして、この現象は国際関係においてのみならず、民間の文化論にも及んでいる点を指摘できる。例えば、今まで海外華人文学といえば、ほとんどがマレーシア・シンガポールの華人文学をあげたのであるが、現在ではアメリカの華人文学を指すことが多くなってきている。また、日本理解、日本論に関連しても、アメリカ経由の日本論が登場している。

一つの例として、荘錫昌が翻訳・解説したルース・ベネディクト著『菊花与刀（菊と刀）』の継続的なまた異なる版を重ねている知識人のうごきをあげることが出来る。これは、日本理解の方法として、戦後アメリカの人類

学者ルース・ベネディクト Ruth Benedict によって書かれた『菊と刀』*The Chrysanthemum and Sword* を翻訳し、そこに原版には無い多くの挿絵や写真が独自に挿入された『菊花与刀――日本文化的諸模式』（孫志民、馬小鶴、朱理勝訳、荘錫昌校、北京、九州出版社、2005年１月）である。そして、この翻訳が大学生をはじめとして多くの読者を得ており、前版が読者を得るとさらにそれに続いて新たな図版解説版が出版されるという現象が継続している。すでに６冊以上の異なる同書の翻訳・解説版が出版されている。改めて言うまでもないが、該書は、戦後にアメリカが日本を占領統治するに当り、日本を「異文化」と見做し、異文化理解の視点からまた心理分析の方法によって第二次世界大戦に至った日本の歴史的な“精神性”を表現したものであり、ひとつの象徴的な議論としてヨーロッパの「罪の文化」に対して日本は「恥の文化」であり、両者は根本的に異なる、とする。今に至るも世界中で日本文化論の代表的著作として読まれている。

現在、中国の知識人が、この「異文化理解」の心理分析方法を通して、日本を議論しようとしていることは、今までの東アジアにおける中国文化の影響を論じた日本文化論とは異なる議論であるといえる。因みに、本書は、“了解日本”系列（挿図本）のシリーズ３冊のうちの１冊であり、他の２冊として、戴季陶『日本論』と小泉八雲（英国人 Lafcadio Hearn）『日本与日本人』（閻敏訳）があげられている。また吉川幸次郎が日本文化を理解する知識人と評した周作人『日本人論』や新渡戸稲造『武士道』なども刊行されているのではあるが、このような日本文化論のきっかけをつくった『菊と刀』にみられるような中国知識人による“アメリカ経由”の日本文化論は、おそらく歴史上始めての試みであろう。

４　新たな「アジア地域主体」の形成――環太平洋・インド洋の沿海都市ネットワーク

グローバリゼーションの動きが、ローカルという概念を中核としてこれまでの上下の地域関係を流動化させ、国家そのものをも地域ダイナミズムの中に巻き込んだことにより、アジアの地域主体も変化してきている。いま、太平洋からインド洋にまたがる海洋アジアを視野に置くならば、そこでは沿海都市という構成主体と行動主体が登場して来るであろう。そして、海を跨いでかたちづくられる沿海都市の多様なネットワークは、政治経済の分析のみならず社会文化的契機を持ったつながりを持つ地域主体の形成が求められる

であろう。沿海都市を基礎的な要素とし、それらを繋ぐことによって生ずるアジアの新たな地域主体の形成がもたらすダイナミズムは、現代のグローバル世界の課題と重なり合うと考えられる。

歴史的に見て、広東と太平洋・アメリカとの関係は、17世紀以降のアメリカにおいて一貫して語り継がれ、地球の反対側にあるカントン Canton という地名が、Arkansas, Connecticut, Dakota, Georgia, Illinois, Indiana, Iowa, Kansas, Kentucky, Maine, Maryland, Michigan, Minnesota, Mississippi, Montana, New Jersey, New York, Ohio, Pennsylvania, Texas, West Virginia, Wisconsin などの多くの州で移民を始めとする移動や交易などさまざまな理由で名付けられた経緯があり、太平洋をまたいで中国・アジアを象徴するものとして広東（広州）という地域（都市）が Canton と英語化して登場した。

また、この環太平洋・インド洋沿海都市ネットワークの課題と可能性を考えるうえで、歴史的にも注目される事例のひとつに、環バルト海沿海都市連合（UBC: Union of Baltic Cities）がある。これは EU のなかのひとつの機構であり、バルト海沿海の105の都市が、都市の資格において参加しており、テーマに応じて関係都市が集まり協議する。共通の課題、競争的課題、交渉的課題など、さまざまである。たとえば、海港都市の高層建築など、環境に関連するテーマや水資源問題など、地球規模のテーマにローカルな都市連合が取り組むという仕組みである。もちろんそこには、バルト海沿海都市間にハンザ同盟（Hanseatic League）という中世以来続く商業・文化ネットワークの長い伝統があり、それらがグローバルな現代に改めて登場していると言えよう。アジアとりわけ東アジア地域がグローバルであると同時にローカルな課題に取り組むための連携にも参考とすべきひとつの事例である。

5　琉球・沖縄からの“アジア知”（Asian Perspectives）の地域ネットワーク

琉球・沖縄から発せられた“アジア知”は、19世紀後半以降の議論に限ってみても、およそ150年、５世代の間に、500年以上の歴史的なアジア的視野を持った議論がおこなわれてきた。例えば、１）明治以降にみる日本ナショナリズムと沖縄伝統社会、２）琉球処分をめぐる対日ならびに対清関係、３）琉球王朝期の明清朝貢関係とアジア交易ネットワーク、４）戦後のアメリカと沖縄･日本、５）アメリカ留学知識人、６）海外移民とウチナンチュー意識、

などである。

これらは、琉球＝沖縄史を500年、150年、50年の長さで議論する世代の変化をも意味しているが、そのなかでも近年には琉球研究の深化が見られ、そこでは琉球王朝時代が琉球＝沖縄史の中心的課題として位置付けられてきた。これは沖縄のアイデンティティとも密接に関連しており、アメリカの統治から日本の統治へと変換し、かつ沖縄が日本やアメリカという外国の文脈から位置づけられることに対して、琉球王朝研究はむしろ海に誇がリ、東南アジアに拡がった琉球＝沖縄のネットワーク・アイデンティティを強調する。

同時に、この琉球王朝史の研究は日本に対してと同時に、これまで以上にむしろ中国に対する係わりとアジアへの視野を提起した。500年間にわたって朝貢国として存在し続けた琉球王朝が中国との関係のみならず、東アジア・東南アジアとの関係においても多角的ネットワークを作りだし、その下で琉球王朝、または琉球商人が長距離の交易、交流活動をすすめてきたことに注目する。

そこでは琉球＝沖縄自身も一つの地域世界として、また海域ネットワーク世界として存在していることが指摘される。琉球王国は、首里の琉球王府が中国に対しては朝貢便節を送る朝貢国であったが、同時に宮古、八重山からは朝貢関係に擬した貢納品を受け取る王権であった。この琉球王国史観ともいえる新たな沖縄認識は単に歴史認識にとどまらず、沖縄の持つネットワーク性、海域性、外への拡がりを強調すると同時に、沖縄の内部世界をより広い多角的な視野において明らかにしようとする特徴をもっている。

琉球＝沖縄史研究においては、歴史的に主要な交渉相手あるいは統治政権の交替として、清朝から日本さらにはアメリカや日本へと変わってくることに対して、上位の権力の変遷によって沖縄・琉球の歴史を区分できないとする捉え方が生ずる。これは琉球世界・沖縄世界を一つの統一的な世界として、その海域像を明らかにしようとする強い動機に裏付けられているといえる。その意味で琉球王朝研究を通した沖縄研究は、東アジア海域史研究に対して新たな課題を、方法的にもまたその対象においても投げかけている。

6 「ガリオア留学生」の足跡

さらに注目したいことは、第二次大戦後の沖縄知識人が示すアメリカ経由の沖縄・アジア知の存在であり、また、これら２つの異なる世代を含め、上記の複数の論点のすべてが相互に歴史的な琉球＝沖縄からのアジア知の円環

をつくり、現在に至って再登場しているということである。

ここでは、ガリオア留学生と呼ばれる戦後の沖縄からのアメリカ留学知識人についてその時代的特徴を、ガリオア・フルブライト沖縄同窓会編『ガリオア留学生の足跡』（那覇出版社、2008年）の「まえがき」（１－３頁、同窓会会長比嘉幹郎）に拠って考えてみたい（以下引用）。

「米国議会は、西ドイツや日本などの占領地と同様、琉球列島の住民を支援するため、いわゆるガリオア（Government and Relief in Occupied Areas 占領地域の統治と救済）資金を支出した。この資金は、民生の安定や経済の基盤整備、教育の振興など多様なプログラムに使えるようにし、1947年度に始まり、その後10年間、毎年更新されることになっていたと言われる。米軍政府は.この資金を活用して沖縄からアメリカへ留学生を送ったのである。沖縄は、1952年に発効した対日平和条約によって日本が独立を回復した後も引き続き20年間、事実上、米軍の占領下に放置されていたし、その間に財政支出の名目は変わっても、沖縄からの留学生は依然として米国陸軍省の奨学資金によるものであったので、実質的に「ガリオア留学生」とみなしてよいだろう。

1945年に沖縄を占領した米軍は、漸次、沖縄における高等教育の振興に着手した。占領翌年には現在のうるま市にあった野戦用キャンプを利用して、学校の教員を養成する文教学校と英語人材の確保を目的とした外語学校を開校した。この両校を礎として1950年に琉球大学を首里城跡に設立したが、その同じ年に「日留」とも呼ばれた日本本土の大学への進学を認め、沖縄からの米国留学、いわゆる「米留」も始まったのである。戦後その頃に向学心に燃えていた沖縄の若いエリートたちは、それぞれの異なる進学の道を選んだが、その半面、戦争や米軍基地内就労など多くの共通体験を持った同世代の仲間同士だったとも言えよう。

沖縄からのガリオア留学生は、沖縄同窓会が2001年に出版した『米国政府援助の沖縄奨学生名簿』によると、1949年の初年度には僅か２人であったが、その翌年度には53人になり、その後、人数に増減はあったものの、毎年継続して送られ、最終年の70年度までには総計約900人、複数回留学生を含めると延べ1,045人になっている。勿論、このなかには1953年12月に日本に復帰した奄美諸島からの留学生も約20人含まれているが、2008年の時点でも7,200人余と言われるガリオア・フルブライト資金の支援で渡米した日本本土からの人数に比べても、沖縄からの留学生数がいかに多かったかが分かる。」…

「留学生各自の専攻科目は、人文・社会・自然科学の各分野、法学、農学、

工学、医学など多岐にわたり、その選択や変更は全く自由であった。学業の成果については、最高学位の博士号取得者が正確に判明できるだけでも58名もいる。この数は目を見張るものがあるし、これほどの成果を挙げ得た留学生の能力や努力、忍耐力は称賛に価する。このPh.D.取得者たちは、日本またはアメリカの大学から学士号あるいは修士号を授与されていることは言うまでもない。」

戦後沖縄の知識人が、太平洋を跨いで、アメリカとの直接的なつながりを持った学術文化を形作ってきたことがわかるのであり、また、アメリカを視野に入れたアジアを論じていることである。

さらにその視野に関して、最近の現れのひとつの典型は、近年刊行が開始された *International Journal of Okinawan Studies*（Kazuyuki Tomiyama, Editor-in-Chief, Vol.1（1）March, 2010, Kenkyusha）にみることができる。Gary Y. Okimoto, 'Okinawan Studies and Its interventions', 西里喜行「明清交替期の中琉日関係再考―琉球国王の冊封問題を中心に―」、伊從勉「琉球祭祀にみる虚構と現実」、Gregory Smits, 'Romanticizing the Ryukyu Past Origins of the Myth of Ryukyuan Pacifism', Joyce N. Chinen, 'Okinawan Labor and Political Activists in Hawai 'i',「ハワイへの憧憬・アメリカへの違和―宮城聰とハワイ―」、などは、これまでの琉球＝沖縄からの多様な時間的・空間的なアジア知を円環させる構想を持っているといえよう。

アジアが太平洋やインド洋を跨いで論じられる。さらに沿海都市関係を通して論じられる。たとえば日中関係についても、環シナ海・環太平洋沿海都市ネットワークを通して論ぜられることになる。この視点が意味するところは、アジアの地域動態を考える上で太平洋の要素が不可欠であるということであり、同時にインド洋からの影響を考えねばならないということである。琉球の交易ネットワークに始まり、沖縄ウチナンチューが発信する海洋アジア・太平洋を円環するアジア知の歴史を振り返り、それらが現在沖縄の知識人によって総合されようとしている過程をたどることによって、これからのアジア知のあり方を窺うことができるのではないであろうか。

おわりに

アジアが太平洋をまたいで論じられるということは、日本と中国に関しても然りである。この現象が意味するところは、太平洋をまたいだ視野やかかわりを考えることが、これからしばらくの間のアジアのありかたを考える文

脈を導き出すであろうということである。

この太平洋という課題は、17世紀以降の歴史・政治・経済・社会・文化などにわたるすべての太平洋体験でもあり、日本にとっても極めて大きいものがあるといえる。戦後のアメリカのアジア政策の中で進められたアジア研究は、日本本土を含むアジアの知識人層の形成に大きな影響を与えており、政治・経済のみならず文化の領域においても多くのつながりとまた新たな転機とを見ることが出来るといえる。

アジアとりわけ東アジアの近未来はこの太平洋をまたいだ関係の検討によってしばらくは続くと考えられるが、その一つとして、環太平洋沿海都市連合の可能性を構想することも、近未来のアジアのありかたを示すものではないかと思われる。

〔参考文献（部分）〕

伊波普猷『古琉球』（1912年刊）岩波書店、2000年
ガリオア・フルブライト沖縄同窓会編『米留五〇年』ひるぎ社、2000年
同上『ガリオア留学生の足跡』那覇出版社、2008年
金城弘征『金門クラブ―もうひとつの沖縄戦後史―』ひるぎ社、1988年
小泉順子「タイ・アメリカ教育交換協定に関する一考察―冷戦初期アメリカの外交戦略と対タイ教育交流―」『東洋文化研究所紀要』第159冊、2011年３月
坂野徹 / 愼蒼健『帝国の視覚 / 死角―＜昭和期＞日本の知とメディア』青弓社、2010年
高良倉吉『アジアの中の琉球王国』吉川弘文館、1998年
照屋善彦・山里勝己・琉球大学アメリカ研究会編『戦後沖縄とアメリカ―異文化接触の50年―』沖縄タイムス社、1995年
中野聡『歴史経験としてのアメリカ帝国―米比関係史の群像』岩波書店、2007年
西里喜行『清末中琉関係史の研究』京都大学学術出版会、2005年
濱下武志『沖縄入門―アジアをつなぐ海域構想―』筑摩新書、2000年
外間守善『回想80年：沖縄学への道』沖縄タイムス社、2007年
松田武『戦後日本におけるアメリカのソフト・パワー：半永久的依存の起源』岩波書店、2008年
山里勝己『琉大物語1947－1972』琉球新報社、2010年

Martin Collcutt, Kato Mikio and Ronald P. Toby, ed., *Japan and Its World: Marius B. Jansen and the Internationalization of Japanese Studies*, I-House Press, Tokyo, 2007
S. C. Humphreys, Editor, *Cultures of Scholarship,* The University of Michigan Press, Ann Arbor, 1997
International Journal of Okinawan Studies (Kazuyuki Tomiyama, Editor-in-Chief, Vol. 1 (1) March, 2010, Kenkyusha, Tokyo
Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence, "China, Europe and the Making of the Modern World Economy*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 2000
Gregory Smits, *Visions of Ryukyu: Identity and Ideology in Early-Modern Thought and Politics*, University of Hawai ʻi Press, Honolulu, 1999
Eric Tagliacozzo and Wen-Chin Chang, ed., *Chinese Circulations: Capital, Commodities, and Networks in Southeast Asia*, Duke University Press, 2011

魯思・本尼迪特『菊花与刀―日本文化的諸模式―』（孫志民、馬小鶴、朱理勝訳、莊錫昌校、北京、九州出版社、2005年1月）